



幼児教育保育学科 教授

國本 真吾

KUNIMOTO Shingo

《専門分野》

特別ニーズ教育学

障害児教育学

地域教育論、教育福祉論

《メールアドレス》

「障害福祉の父」糸賀一雄の発達保障思想の形成と継承 ～障害のある子どもの保育・教育・療育の実践を支える理論～

【「この子らを世の光に」を現代に】

戦後、わが国の「知的障害児の父」「障害福祉の父」と讃えられた、鳥取県出身の糸賀一雄(1914～1968年)は、1946年、池田太郎・田村一らとともに、滋賀県大津市南郷に近江学園を創設した。学園は当初、戦災孤児・生活困窮児と知的障害児を保護するとともに、教育・福祉・生産・医療・研究の多面的な機能を兼ね備えた民間の総合施設として計画された(1948年～県立)。また、年長者や重症心身障害児・者に対応する施設の創設など、新たな課題に対応するべく施設を分化させ、法制度よりも先行した試みも行われていく。近江学園は、戦後の知的障害児教育・福祉のパイオニアとしての役割を果たしてきた施設であるとともに、わが国の社会福祉の発展に大きく貢献したとして評価される。

糸賀が残した言葉として、「この子らを世の光に」という言葉がある。「この子らに世の光を」ではなく「この子らを世の光に」という形で語られることが多いが、前者は恩恵・慈善的な当時の障害観・福祉観を示し、後者は近江学園の実践を通して築き上げられた本人の自己実現・主体性を軸とした新たな視点の提起である。これは、ノーマライゼーションやエンパワーメントといった、現在の福祉の思想を先取りするものとしても注目される。このような糸賀の思想、近江学園や関連施設の実践を通して確立された障害観・児童観または人間観は、「発達保障」思想として教育・福祉関係者に共有されてきた。

本研究では、糸賀の発達保障思想がどのように形成されてきたかを検証することとあわせ、一施設の実践がわが国の障害児教育・福祉の諸施策にどのような影響を与

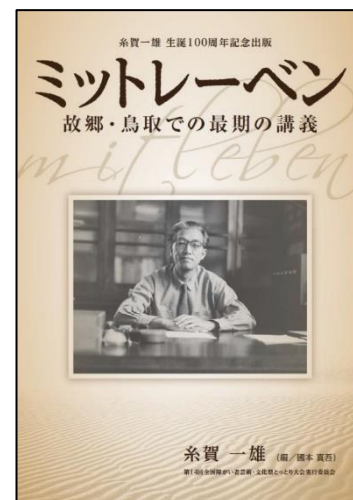
えてきたかを明らかにしようとしている。また、福祉先進県を志向してきた鳥取県において、郷土出身の糸賀の精神をどのように引き継いでいくかを検討し、今後の行政施策や教育・福祉実践にそれを反映させるための提言を行っている。

【糸賀思想の鍵である「共感」をミットレーベンの語から読み解く】

糸賀が故郷・鳥取の地で最後に講義を行った際、著作物には一切登場しない「ミットレーベン」という語を用いている(1968.1、鳥取県立皆成学園)。独語で「ともにくらす」という意味で糸賀は用いたが、糸賀思想で象徴的な「共感」性を理解する上で、鍵になる語として注目される。

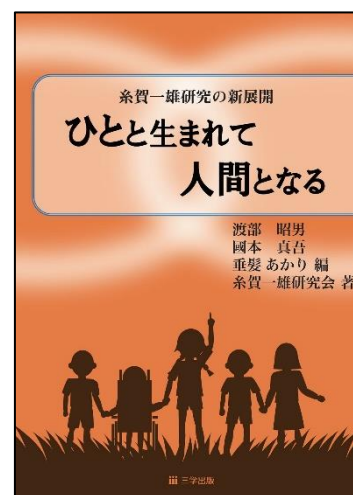
糸賀は54歳でこの世を去る。有名な「この子らを世の光に」の語は、完成された糸賀思想をあらわすものとして理解せず、その後もさらに発展されていくものであったととらえられるべきであろう。糸賀の「ミットレーベン」の語の使用は、現段階では晩年の講演や講義においてのみ確認されている。「この子らを世の光に」の次なるステージとして、「この子らと(ともに)世の光に」という共生する社会の創造を展望していたとも考えられる。

そして、糸賀思想は現代の人間社会の在り方を問う意味でも、再注目されている。相模原障害者施設殺傷事件、優生保護法に基づく強制不妊手術の被害訴訟、新型出生前診断による障害胎児の中絶問題、そしてCOVID-19感染者へのバッシング問題など、人間同士の有り様や「いのち」の意味を考えるうえでも、今なお示唆に富むものである。保育・教育・療育の世界でも、子ども観や実践に大きく影響を与え続けている。



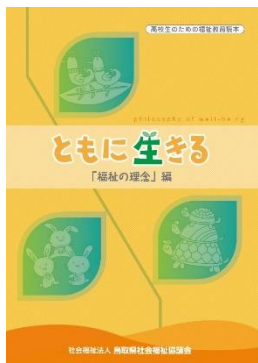
【参考文献】

糸賀一雄(國本真吾編集)(2014)『ミットレーベン～故郷・鳥取での最期の講義～』第14回国障がい者芸術・文化祭とつと大会実行委員会 [ダウンロード] <http://www.pref.tottori.g.jp/247318.htm>



【参考文献】

渡部昭男・國本真吾・垂髪あかり編、糸賀一雄研究会著(2021)『糸賀一雄研究の新展開 ひとと生まれて人間となる』三学出版



【参考資料】

鳥取県社会福祉協議会発行『高校生のための福祉教育読本「ともに生きる」』は、全面的に國本が執筆を担当。糸賀思想の紹介とともに、保育・教育や福祉をめざす人への導的な内容で構成している。「鳥取県社会福祉協議会」のHPからダウンロード可能。

http://www.tottori-wel.or.jp/p/hukushi/we_top/we/